



童話の部
大賞

2024

第41回 日産 童話と絵本のグランプリ

春風の魔法使い

紫野

唐くんは大きな猫みたい。髪はボサボサでふわふわ。中学生みたいに背が高けれど、猫背。日本人より大きな体をかがめて机に座っていると、狭い場所にぎゅっと詰めこまれているみたいで、窮屈そう。

四限の授業は国語。唐くんが生まれた国の詩です、と先生は、難しい漢字の文を黒板に書いた。春暁。深緑色の背景に、静かに整列した白いチョークの文字は、まるで古びたお経みたい。

教室はたんぼぼ色の陽の光できらきらしていた。わたしの席は、唐くんななめ後ろ。

「ふわあ」

「こら、唐さん。授業中にあくびをしない」

「…はい、ごめん」

クラスのみんなはくすぐす笑い、先生にはごめんなさいだよ、と近くの席の子が教えてあげる。五年生になって転入してきた唐くんは、去年の冬、中国から日本に来たばかりで、日本語は

少ししか話せない。

「みんな德音読してみましよう。春眠 曉を覚えす」

いま怒られたばかりなのに、唐くんは目をくしゅくしゅこすって、また小さなあくびをした。そんなしぐさも猫っぽい。

「処処 啼鳥を聞く」

先生の声が教室の反対側へ離れていく。その朗読のあとを声で追いかけてから、わたしはこっそり唐くんをぬすみ見る。先生にしよつちゅう叱られて、よれよれの教科書、くしゃくしゃのプリント。机の横に引っかけられている、ドラム型のリュックの口からは、放課後クラブのジャージと大きなバスケットシューズがはみ出している。

授業中はいつも眠そうだけど、バス

ケしているときは、どんなふうなんだろう。

「夜来 風雨の…こ、えっ」

その瞬間。まるで飛んできたボールをキャッチするみたいに、唐くんが何もない空中をふわつと手で掴んだから、

わたしはびつくりしてしまった。先生のことについて朗読する声が、思わず裏返ってしまう。

唐くんの席は窓際。

たぶん、目撃者はわたしだけだった。

唐くんは握ったままの右手を、窓から外へ出し、ぱつと開く。白くて、ほんの小さな。

あ、

たんぼぼの綿毛。

教室を浮遊していた迷子の綿毛は、唐くんの大きな手のひらから、ふわりと風にさらわれて、あたたかい陽だまりの中へ戻っていく。唐くんは相変わらず眠たげに、ぺたんと背中を曲げて机にくっつける。

「花落つること知る多少」

まるで自分が唐くんに助けられたみたいなのがして、わたしは何だか胸がどきどきしてしまう。唐くんの秘密の優しさを、わたしだけが知っている、みたいな。言葉が通じなくて、ちよつと怖いような気もして。ほとんど喋っ

たこともないのに。

「では、唐さん、中国語で読んでみて」

はい、と唐くんが席から立ち上がる。暗唱しているようで、一度も黒板を見ない。

「春眠不覚曉

夜来風雨声

処処聞啼鳥
花落知多少」

まるで歌を歌っているみたいだった。唐くんの生まれた国の詩です、と先生は言ったけれど、日本語で朗読したときは、ただの文字の羅列だと思えなかった。

ただで唐くんが読むと、それは確かに、音楽に聴こえた。うつくしい、海の向こうの国の歌。読み終えると、教室からは自然と拍手がわき起こる。

「西安の春はどんなふうですか？」

「西安、春、は……」

先生の質問に、唐くんはうまく言葉が見つけれない。早口の中国語で何か喋る。身振り、手振り、表現しようとして、でも先生にもわたしたちにも伝えられなかった。結局、諦めたふう

なただとどしい日本語で、「あつい、も、さむい、も、ある」と答えた。みんなが笑い、唐くんもつられて苦笑いする。わたしの耳には、唐くんの低い歌声の響きがずっと残っていた。窓の外、校庭では、たんぼぼの黄色い花畑が風に揺られていて、わたしはさつきの綿毛のゆくえについて考える。

春風に乗って、どこまで飛んでいったらう。

帰り道。わたしは見慣れた通学路の真ん中に、見慣れないバスケットシューズがぼつんとひとつ、落ちていたのを発見した。まるで、シンデレラのガラスの靴みたいに。

道路の先には、一人で下校する唐くんの背中。例のリュックがぼつくり口を開け、もう片方のバスケットシューズが引つかかって、それも今にも落下しそうになっている。

舞踏会でも、真夜中でも、わたしは王子様でもないけれど。そのとき、わ

たしは十一年の人生で、最大級の勇氣を振り絞った。

「……唐くん！」

前を行く唐くんが振り返る。靴を拾って、そばまで駆け寄る。心臓がドラムみたいに、わんわん鳴った。

「落ちてたよ。あと、かばん、開いてる」

「? ……あ! アリガト」

「い、一緒に帰っても、いい?」

「はい。内田さん、同じ、道?」

「えっ! あ、えっと、うん」

名前、憶えてくれた! わたしはどきまぎしてしまつて、唐くんの家の場所なんてろくに知らないのに、とつさに頷いてしまう。

わたしが渡した靴を、唐くんはぎゅうぎゅうとリュックに押しこんで、無理やりファスナーを閉めた。バスケットシューズも、教科書も、水筒も、シャーペンも。みんな一緒にたなつて、猫のおもちや箱みたいに、その中に詰めこまれていたのを知っている。「日本には、慣れた?」

「あー、わからない」
「今日の授業で、先生が言つてた…、唐くんは、西安、っていうところに住んでたの?」

「はい。西安」

水色の絵の具を溶かしたふうな、空と雲がきれいだった。並んで歩くと、唐くんはわたしより頭ひとつぶんも背が高い。唐くんの隣で、ランドセルなんて背負っている自分が、急に子どもになつたみたい感じがする。

歩道沿いには小さな公園があつて、古い桜の木が一对、その下には遊具とたんぽぽの群生地が広がつていた。西安はどんなところ、と尋ねかけて、今日の授業中のことを思い出し、聞きかたを変える。

「西安にも、桜は咲く?」

公園のすべり台や、ブランコに、白い桜の花びらが散りかかつて、まるで粉雪みたいに見えた。春なのに、雪が降っているみたい。唐くんが急に黙つてしまつたから、日本語が通じな

かつたのかな、とわたしは不安になつて、隣を見上げる。

唐くんの黒い瞳に、空の深い色と桜の花の枝が映つていた。

「忽如一夜春風來、千樹万樹梨花開」

誰も知らない古代の歌のような、調べ。その瞬間、一陣の突風が吹いて、雪のような桜の花びらを一斉に空へ舞い上げた。わたしは一瞬、唐くんがほんとうに魔法の呪文を唱えて、そのため風が巻き起こつたんだと思つた。

唐くんは風の魔法使いだつたんだ。

「中国の、古人…、春の、形容」

「…あ、もしかして、今のつて、詩?」

「春曉」みたいなの?」

唐くんは頷く。わたしはランドセルからタブレットを取り出し、音声入力をオンにして、「もう一度、言つて」と頼んだ。唐くんはタブレットの液晶画面に向かって、同じ魔法の呪文を繰り返してくれる。

「まるで春風の夜のよう、何千本もの木々と梨の花が咲く」

少しいびつな日本語。機械の翻訳だから、正確な訳ではないのかもしれない。でも、わたしのまぶたの裏には、春のほのかに冷たい風、その風に、吹雪のように花びらを散らしながら咲く、満開の木々と白い花が思い浮かんだ。風が止み、重力に従つて、桜の花びらははらはらとアスファルトの上に着てくる。

「西安の…春、は」

「うん」

「雪は、水に、変わります。鳥は飛びます。川の中に、花があります」

「川の中に花?」

唐くんは指をひらひらと波の形に動かして、上から下に流れ落ちるようなしぐさをする。花が散つて、川の水面を流れていくということかもしれない。「空気は花の、香りがあがる」

「花の香りがする空気。」

わたしは遠い海のかなた、わたしの知らない、唐くんの故郷の街のことを想像した。そこでは春になると雪は溶

けて水になる。雪だけ水がせせらぐ川を、梨の花びらが流れていく。空を飛ぶのはどんな鳥だろう。空気はどんな花の香りがするんだろう。

その異国の都では、誰もがこのうつくしい、音楽のような言語で話す。まるで魔法の国みたいに。

わたしと、唐くんが歩いていく通学路を、桜の花びらがお祭りみたいに彩つていた。

「わたし…も、行つてみたい。西安に」

「はい。来て、いつか」

「うん。いつか」

そして、そのときに。

唐くんは人懐っこい猫みたいに笑つた。

「わたし、春が好きです」

きみが隣にいたらもつといいの。つて、思つたのは、まだ誰にも言わない、わたしだけの秘密。

審査員コメント

たった十枚の物語の中に、確かに唐さんがいました。唐さんの語る、故郷・西安の春が目に見え、わたしと唐さんのたどたどしいやり取りが温かく、言葉や国の壁を越えて心を通じ合わせようとする二人に拍手を送りたくなりました。本当にいい作品でした。

富安 陽子

紫野

公務員 兵庫県

受賞のことば

十代のころからずっと、いつか作家になりたいと思いつつ、なにものにもなれていない自分がずっともどかしかったのですが、今回の賞をいただいたことで、なにか少しはかたちあるものになれたような気がしています。今後の創作の励みにしていきます。このたびは素晴らしい賞を、本当にありがとうございました!

